



教師を目指す学生による「学生文化」「学校文化」の創造と
新たな「学生と学校のWin-Winの関係」の構築

東浦町SP通信

～東浦町では、学生ボランティアを“職員の仲間”という思いを込めて、
「SP」または「スクールパートナー」と呼んでいます。～

第11号

2026年8月21日

編集 緒方 なな
東浦町教育委員会
SPコーディネーター

わく算3日目

わく算3日目です。あっという間にSPさんたちは慣れてきて、なんだか頼もしい背中になってきました。SPさんの成長スピードは凄まじいです。SPさんたち同様、子どもたちもだんだん慣れてきました。笑顔も増えてきました。それと同時に、休憩との切り替えが難しくなってきた子も出てきました。これが現場の“リアル”です。そして、こういう場面がSPさんの腕の見せ所であり、生きた学びができるチャンスにもなります。この日の終わりの打ち合わせ時に、中村コーディネーターがこう仰っていました。「叱ることは簡単にしない方が良いですよ。叱るという方法がいけない訳ではありませんが、子どもとの関係ができていない中で叱ってしまうとその瞬間に関係が一気に崩れてしまいます。あるSPさんは、今日大変な場面がありましたね。そこでそのSPさんが凄いのは、担当したその子を『学校嫌いにさせなかったこと』です。明日、そして来週から「学校に来たくない」と子どもたちに思わせてはいけません。でも、指導しなければいけないことはある……。叱らずに、どう問題行動を止めるか。学習に向かわせるか。いろいろな方法があります。ここでたくさん練習してみてくださいね。」これは、机の上では絶対に学べないことです。Let's チャレンジ！



また、わく算終了後にあるSPさんがこう質問してくれました。「保護者の方が、今日は文章問題に取り組んできて欲しい、と書いてくださっていました。しかし、当の本人は全くやりたがらず、結局文章問題が出来ずに終わってしまいました。こういう場合、どうしたらよいのでしょうか？」とても良い質問ですね。ぜひSPさん同士でこうした悩みを共有してみたいです。そしてこの質問、よくある場面の1つでもあります。他のSPさんに「あなたならどうする？」と聞いてみました。さすが教職を目指している学生さんだけあって、いろいろな案が出てきました。「やっぱり褒めることが大切では？」「まずは別の問題（計算問題など）に取り組ませてやる気を出させるのが良いかも。」「お母さんを見返したくない？一緒にやってみようよ！とかも動機付けになるかな？」などが出てきたところで、シニアSPにも聞いてみました。「自分であれば、無理にその場面で文章問題には取り組ませないと思います。きっと、お家でも

『やりなさい』と言われているから、やりたくなくなっているのかな……？と思います。ここで無理に『やりなさい』と言ったら、間違いなく算数が嫌いになってしまう……。これでは、わく算の目的と真逆になってしまいますよね。まずはその子に『そうか、やりたくないんだね。お母さんが文章問題やってきてほしいって書いてくれているけど、お家でも言われるの？』と聞いてみます。そうするときっと、たくさん話をしてくれるはずです。そうしたら、『そっか。でもさ、今日文章問題やっていかなかったら、また言われちゃうことない……。ちょっとここでやってみる……。？』と聞いてみます。そうすると、ちょっとやっておこうかな？と思えるかもしれません。」とのことでした。目の前の子、そして保護者の想いを考えると、どうしても「(その場で)何とかしなければ」と思ってしまいがちですが、大切なのはその子に寄り添い、傾聴することかもしれません。子どもたちは(大人もそうですが)、話を聞いてもらうだけで自己解決できることが多々あります。困ったな……と思った時は、なぜそう思ったのか？なぜその発言が出てきたのか？子どもに直接聞いてみる、というのも一つの手かもしれません。

今日は、静岡県からシニアSP(N先生)が1名駆けつけてくれました。そして、こんな話をしてくれました。教員3年目の先生です。

今日の様子を見ていたら、みなさん本当に楽しく算数を教えていたなと思いました。でも、教師になると、「楽しく教えて終わり」ではなくなります。評価をしなければなりません。成績をつけなければなりません。成績をつけるための評価は3観点で行います。「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つですね。「知識・技能」は簡単にいえば、基本的な計算でしょうか。「思考・判断・表現」は応用問題とも言われますが、ここでよく、『「思考・判断・表現」は「知識・技能」が身につけていないと分からない。だから、「知識・技能」が身につけていない生徒の「思考・判断・表現」は評価が取れない。』と言われがちです。ここで、バサッと切られる生徒を何人も見てきました。でも、僕は、それは違うと思っています。今日でも、SPさんが横に居てくれたり一緒に考えてくれたりしたら、ちょっと難しい応用問題を解けたことがあったかなと思います。この瞬間は、子どもたちの思考力が上がっていると思うのです。他の例として、自分が授業で「何で分母が0になったらいけないのか」と質問してみると、小学校の算数が出来ていない子たちでも一生懸命考えて何とか答えまで辿りつくことができました。だからこそ、**教師の力を使って子どもたちの思考力・判断力・表現力は伸ばせるし、知識・技能も主体的に取り組む態度も伸ばせると思います。**そこが教師という仕事の魅力だとも思います。あとは、みなさんの腕にかかっていますよ！頑張ってください。

N先生の話を受けて、中村コーディネーターもお話してくださいました。

今まで、「思考・判断・表現」を伸ばすような授業を学校ではやってきていないのです。ましてや「主体的に取り組む態度」については、(教師が)育ててきていないのです。みなさんが教師になったら授業で、子どもたちに発問をしますよね。では、何のために発問するのでしょうか。(算数の授業で、「問1の答えは何？」というのは発問ではありませんよ。) **なぜ子どもたちに“問う”のか。**それは“子どもたちに考えさせるため”なんです。子どもたちに考えさせないような問いを doing は、子どもたちに力はいきません。それをここではみなさんちゃんとやってくれています。子どもたちに十分の力がなくても、半分持っている力を工夫すれば、問題を解くことはできます。そういうことをみなさんはさせてくれています。そしてこれは本当に良い経験になります。もう一度言います。メインは **「子どもたちに考えさせるために教師は問う」** のです。覚えておいてください。